

30284



教科書文庫

3
810
32-1897
20000
17688

M30
1897

Kodak Gray Scale

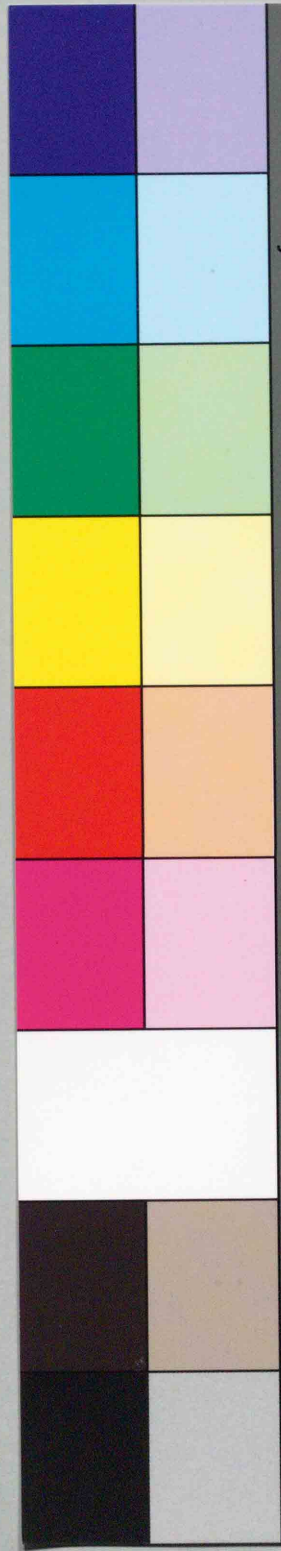
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Shi 14
資料室

子女
日本讀本
新保磐次著
上篇第一





緒言

一、本書ハ高等女學校國語科及ビ女子高等小學校讀方科ニ用ヒンガ爲ニ作レル者ナリ。何レモ毎半期一冊ヲ課シ、通計八冊四箇年ノ後、高等女學校ハ中古文体ヲ主トセル書籍ヲ用フベク、高等小學校ハ恰モ之ヲ以テ全科ヲ卒フベシ。故ニ古人ノ文ヲ取ルニモ其ノ程度ヲ考ヘテ、平家物語、大平記等ヲ限リトシ、ツレヨリ以上ノ古文ハ取ラズ、多クハ徳川時代ノ文ヲ取レリ。

二、古人ノ文ハ務メテ女兒ノ智能ニ適シタルモノヲ撰ビタルハ勿論又文學上ノ利益ト興味ヲ備ヘタルモノヲ撰ビタリ。或ハ優美ナルモノ或ハ流暢ナルモノ或ハ灑落ナルモノ或ハ精細ナルモノ等其ノ文體人ニヨリテ異ナリト雖、要スル所イヅレモ文學上ノ利益ト興味トヲ與フベキモノナリ。然レドモ女兒ノ智能ニ適シタル者ヲ撰フニハ必シモ其ノ人ノ文ノ最上乘ナル者ヲ取ルコト能ハサルハ勿論ナリ。

三、古人ノ文ハ勿論、今文ト雖、種種ノ文体ヲ具ヘテ讀書カヲ養ハンコトヲ務メタリト雖、要スルニ嫻雅優麗ニシテ女子ニ適スベキモノヲ以テ本体トセリ、蓋シ男女同文ノ國ト雖、女子ノ文章ハ風姿自ラ異ナラザルヲ得ザレバナリ。

四、簡短ナル文ハ少ケレバ面白キモ、多ク之ヲ集ムレバ却リテ讀ム者ヲシテ倦マシム。長文ニシテ事實ノ連續セルモノハ却リテ讀ム者ヲシテ飽カシムルコト莫シ。本書往往長篇ノ文多キハ此ノ故ナリ。

五、古人ノ文ニハ通篇語句連續シテ段落句讀分明ナラザルモノ多シ。是レ等ノ文ニハ務メテ段落ヲ多クシ句讀ヲ細カニシ以テ女兒誦讀ノ便ヲ計レリ。而シテ之ガ爲ニ文句ヲ添削セル所アリ。

六、又古人ノ文ニハ一篇ノ中一、二節兒童ノ誦讀ニ適セザル所アルモノアルハ自由ニ之ヲ節略セリ。又語句ト云ヘドモコレハト思ハルルモノハ思フ儘ニ改削セリ。蓋一ハ女兒ノ智識ヲ思ヒ又一ハ原本騰寫、印刷ノ誤リヲ思ヘバナリ。本書ハ名家ノ文集ニアラズ、女兒ノ讀本ナリ。

七、本書歌ヲ多ク載セタリ。蓋歌ハ文學上ノ美術ナリ、文學ノ嗜好ヲ起コサスルモノ歌ニシクモノヤアル。而シテ歌ハ多ク平易ナル長歌ヲ取リ又馬琴等ガ小説ノ中ヨリ口調ヲ齊ヘタル節ヲ取リテ歌ニ代ヘ用ヒタル所アリ、コレ眞ノ長歌ノ入門トモナスベク流暢ニシテ而モ興味アルモノ多ケレバナリ。

八、本書上編ハ多ク理科、家政等實用ノ題ヲ以テ文ヲ成セリ。然レドモ其ノ主意トスル所ハ有用ノ文字文章ヲ教ヘ、無子テ其ノ志望趣味ヲ養フニ在リ、故ニ數字的其ノ他精細ノ專科的記載ヲナサズ。又地理ノ如キモ紀行、景物ノ如ク、地理書ノ趣味ヲ助クベキ者ヲ撰ベリ。

九、本書中編以上ハ漸ク文學ニ傾キテ理科家政等ノ事實ヲ知ラシムルコトヲ必トセズ。蓋著者ノ意ハ讀本タル者ノ要ハ詞ヲ解シ文ヲ讀ムコトヲ教フルニアリト謂フナリ。凡一科ノ學科ニ於テ一事ヲ專ニセズシテ數事ヲ兼子修メシメントスル時ハ科程終ニ紊亂シテ望ム所ノ利ヲ得ザルノミナラズ、反リテ思ハザル害ヲ招キ出カスベシ。

十、文ヲ讀ムニ自法アリ、音聲ノ高低、上下、口調ノ遲速、緩急務メテ文意ニ協ハシムベキナリ。本書ハコレヲノ條線ニ意ヲ用ヒタリ。

十一、本書每卷ノ終ハリニ字辭ヲ設ケテ全卷中ノ六ツカシキ文字典故ヲ註セリ。ソハ古人ノ文ヲ採ルニハ何程注意スルモ一篇ノ中二一ニ難句アルハ大抵免カルベカラザル事ニシテ、之ヲ避クル時ハ殆ド採ルベキ者ナキニ至ラン。是レ等ノ意

義ハ生徒タル者若シ字解ニ由ラザレバ遂ニ教師ノ講義ヲ待ツベキ者ナリ。故ニ本書ハ豫メ字解ヲ用意シテ以テ是レ等ノ場合ヒノ便宜ニ供セリ。

十二、季節ニ關係アル課ハ成ルベク其ノ時ニ應セシムベクシ、其ノ配當ハ今ノ學年ニ從ヘリ。

明治二十八年九月。

子女
日本讀本。上篇第一。目次。

- 春の最中。
- 養蠶紡績。
- 稻生春子。
- 日記帳簿。
- 文通。
- 牡丹。
- 胃。
- 和洋の食物。
- 肉類。
- 鳥と狐。
- 牛乳。
- 洗濯。
- 樹木の年齢。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十八

出来心。 二〇
 かね。 二三
 色。 二五
 とみ女。 二七
 金魚。 二八
 みし女。 三〇
 看病。 三一
 編み物。 三三
 吝嗇。 宮崎安貞一農談全書。 三四
 儉約。 三五
 六憎。 柳澤里希一雲華雜錄。 三六

二〇
 二三
 二五
 二七
 二八
 三〇
 三一
 三三
 三四
 三五
 三六



女子日本讀本。上篇。第一。

春の最中。

山山の雪もいつか消ははてて、吹く風何もなく物
 やはらかなり。若草は野山に青みあたりて緑の敷
 きものを敷けるが如く、木の芽、若葉も一雨でとに生
 長して、時知らぬ松さへ「今一しほの色」を添へぬ。
 梅、桃の花は己に散りぬれど、枝に残れる實の南京
 玉ほをなるも愛らしや。春季皇靈祭の頃彼岸櫻や
 うやう咲きをめてより、一重、八重、濃き、薄き、色色の櫻

吾れ劣らじとつぎつぎに咲き出で、四月の半はにも
なれば、世の中いづこもいづこも櫻になりて、雲か雪
かそのみ疑はる。まして名高き吉野山、京都にて
は嵐山、嵯峨や御室の花盛り、名をのみ聞きても心は
浮き立つなり。
されど山家、寒國にては百花未笑顔を見せず、鶯も
猶聲を惜しむ處あるべし。斯かる寒き處には四、五
月の頃に至りて「梅櫻桃李一時に開く」これも亦面白
き眺めなり。

此の頃は暑からず、寒からず、一年中の好き時節に

して、ただ遊ぶに宜しきのみならず、働くに亦宜し。
恰今は年中の仕事の始めにして、稻の種は彼岸より
已に水に浸して、田に蒔くべき用意せり。麻の種は
三月、綿の種は四月、何れも蒔くべき時になれり。

蠶の時節も亦四月なり。養蠶は女の手業の重な
るものなれば、高く貴き人も皆此の業を習ひ給へ
り。蠶を養ふ女たちは花見ることば扱置き、髪あげ
化粧の隙もなく、ひたすら蠶の生長を樂しみて餘念
なし。此の頃は樂しき事、忙がしき事の一つに落ち
合ふ時ぞかし。

養蠶、紡績

蠶を養ひて繭を作らしめ、繭より絲を紡ぎて絹糸となす。其の手續きのあらましを知るは面白く且有用のことなり。

桑の葉の初めて生ずる頃を計りて、蠶卵紙を温かなる處に置けば、卵より小き小蟲生まる。之を蟻蠶と云ふ。桑の若芽を摘み並べたる器の上に鳥の羽を以て此の蟻蠶を掃き落とす、これを「掃き立て」と云ふ。さて蠶は桑を食ひて生長し、七日又は十日でとて



一度皮を脱ぐ、其の時は絶食して恰眠るが如し、之を「第一眠」「第二眠」等と稱す。第四眠を終へてより八、九日又は十一、二日の間に蠶は繭を作りて、之に籠もる。其の時を計り、「まぶし」として葉を折りかがめたる物の中に移して繭を結ばしむ。

女 日本書紀 卷一 三

子... 蠶は極めて不潔を嫌ふ者なれば、之を養ふ間は萬事清潔を専とし、鹽け、油け、汚れ、臭みなど、の觸れぬやうに心を付くるなり。

繭の中に籠もれる蠶は漸蛹に變ず。若し之を暖かなる處に置く時は數日にして蝶に變じ、繭を破り出でて卵を生む。此の卵を生み付けたる紙は即蠶卵紙なり。

然れども多くの繭は蛾を生ぜぬ前に糸に紡がるなり。糸となすにはまづ繭を温湯に浸し、之を温火に掛けて煮る。煮ながら玉蜀黍の小箒にて静か

にかき廻はし、繭に付きたる糸屑を取り掃ふ。

新しく掃除せる繭を前の箒にて撫でながら糸口を引き出だし、十五、六の糸口を一つに合はせて棒に巻き付くるなり。此の糸を二三本又は三、四本より合はせたるを「まり糸」と云ひ、厚手の織り物を織るに用ひらる。前に掃ひ取りたる糸屑を紡ぎたるをば「のし糸」と云ひ、屢斗紬等の織り物に用ひらる。

稻生春子。

稻生春子は二百年前の人にして江戸の河瀬氏の

女... 二百年前... 江戸... 河瀬氏...

娘なり。五歳の時母を失ひ、善く繼母に事へて其の心を歡ばしめ、後に稻生恒軒に嫁して貞實柔順の聞こは高く、舅姑には孝順に、子弟には慈愛に、下女下男には深切を盡くして、一家和合せり。

春子は女の手業に達し、裁縫、洗ひ、張り等に人の手を頼みしことなし。又讀み書きの道にも暗からねば、日日の費用は云ふに及ばず、文通の往來、進物の取り違り、其の他萬端委しく日記に書き留めて後日の見合はせの爲にせり。加之實母の生前の行狀を聞くがままに書き集めて身を脩め、家を齊へ、父母舅姑

に仕ふる有り様を子孫に教ふる爲にせり。

元祿年中春子齡七十七にして歿しぬ。春子豫め死するを知りて後後の事をも委しく書き遺して別れを告げ置きぬ。斯く何事にも心を用ふること細やかなる人こそ實に婦人の鏡とも云ふべけれ。

日記、帳簿。

日記付くる程面白きことはなし。夕飯を終へ、洗ひものも仕舞ひて、皆皆打ち寄り、今日ありし事をもを雑談しながら、小き手帳を取り出でて書き付くるに、

効き妹の差し出でて言はを入るるも愛らし。

「今日は日曜なれば小川たすみ様朝より遊びに來給ひ、共に唱歌したり。妹も『君が代』をよく歌ひたり。午後より妹と共に草摘みに行き、澤山の花を得て歸り、祖母様へ上げたり。」なぞ記し置けば、後に取り出でて見るに、其の時の事思ひ出でられて、面白きこと限りなし。

其の他日日の天氣、寒暖、課業、復習、仕事、外より來りし書狀、吾れより送りし書狀のあらまし、使ひの口上、買ひ物の直段等を一一留め置く時は、後日に至りて

失念を取り返し、間違ひを正す等の助けとなるものなり。

年長じて一家を取り賄ふに至りては此の事猶更肝要なり。殊に金錢の出入りをば別に帳簿を作りて委しく記し、月末に至りて差し引き算用して、入金多きか出金の多きかを見るべし。若し出金多きに過ぐるを見れば、更に帳簿を繰り返して買ひ過ぎの物なきかを調べ、來月の買ひ物の心得となすべし。古語に「入るを量りて出づるを爲す」とは此の事なり。すべてかやうの事は効き時より爲馴るれば樂し

女子部 讀本 七 高 第一 七 全書 卷之六 終

みて爲るものなり。年長じて俄かに初むれば、心むづかしく、或は忘れがちにて遂に中絶すること多し。

文通。

「去るものは日に疎し。」とて、一時親しく交じはりし間も、久しく音信を聞かざれば、いつとなく忘れゆくものぞかし。殊に女は内に在ること多く、世間の用事寡きものなれば、萬事不沙汰になりがちなり。斯かる折りに古き交じはりを温めて、昔を忘れざらしむるは文通なり。

世には然るべき用事をければ手紙を書かぬもの嫌に思ふ人多し、是れ大なる誤りなり。暑さ寒さに付けて人の安否を尋ね、何事もなきを喜ぶこそ親しき人の心なれ。事ある時又は用事を頼む時のみ音づれて平生不沙汰をするは誠に不親切の事なり。用事なくて手紙の書けぬと云ふは心の用ひかた足らぬなり。人を思ふ親切だにあらば風雨寒暄すべて目の前の事皆人を尋ぬる媒ならぬはなし。たとへば、

昨日の風にて御庭の櫻は残りなく散り果て候

女子部 讀本 七 高 第一 七 全書 卷之六 終

はんと推しはかり候。こそしは花の内にて一度伺ひたく存じ候ひしも養蠶や何やと取り紛れ思ひながら御不沙汰仕候。御老人様御小兒様御替りもあらせられず候也。

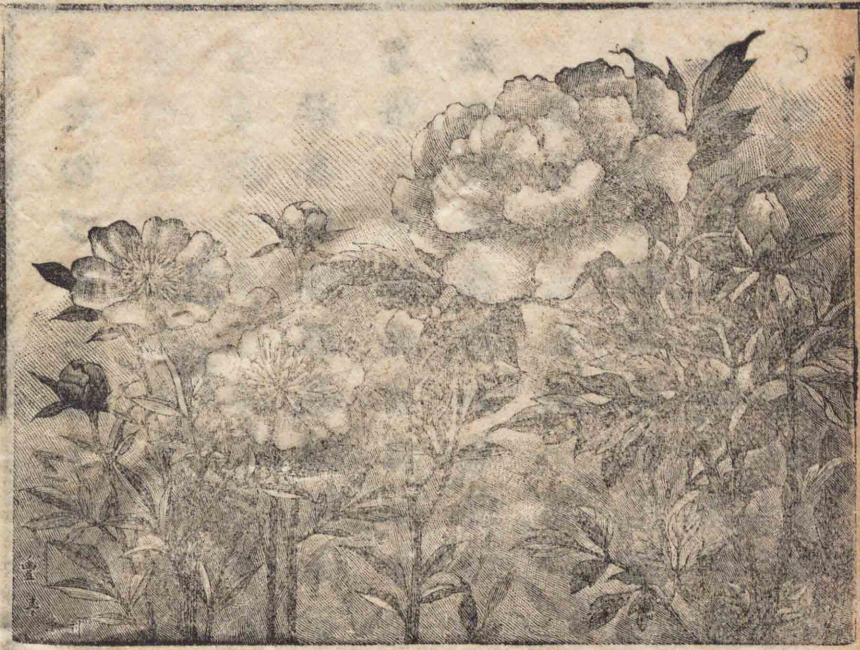
其の他雨の朝には花の開かんことを思ひ、雪の夕には老人の寒からんことを思ふなを様様あるべし。さりながら吾が暇あるに任せて、人の忙がしき時をも顧みず、うるさく文通し、又は同じやうなる事のみ屢言ひ送り、さては不用の事をあまり長長と書きつづくるは宜しからず。親切なる人は求めずし

てたのづから善き文も出で来るものなり。

牡丹。

牡丹は亦深見草とも云ひて古へより賞美する花なり。支那にては之を百花の王と稱すること吾が國の櫻の花の如し。

深見草とは云へば牡丹の莖は草立ちに非ず、小さき木立ち即灌木にして、善く生長したるものは三、四尺の高さに至る。其の花多くは美しき薄紅色にして、一重あり、八重あり、輪の大きなるは直徑一尺に至



り、福福しき美しさは他に
 並ぶ者なし。色變り種
 のれをも白と薄紅とを第
 一とし、其の他の色は唯珍
 しと云ふまでなり。
 芍薬も牡丹の類なれ
 ど、草立ちなり。其の花の
 美しさは牡丹の妹とも云
 ふべきなれど、牡丹よりは
 月て易く、且其の根は昔薬

種に用ひられし故、處處に多く植ゑられたり。

牡丹は甚養ひ難きものにして、熟練の植木師に非ざれば、葉を損ひ、茎を腐らすこと多し。芍薬は花終はりて後、其の莖を刈り、秋の中に根分けして十分肥料を入れたる地に植ゑ、其の上に葉を掩ひて寒氣を防ぐに事足るべし。斯くすれば、翌春深紅の芽を出だし、其れより愛らしき若葉を生じ、夏に至りて美しき花を開く。

牡丹は名花なれども、常に植木師の花園に育てらるるを以て、京都、大和の櫻の如き大いなる名所なし。

子 日本書紀 卷之二十一 大和國 金海堂書新林社

近頃外國に賣り出すこと漸多くして、攝津の池田邊に最多く作れり。遊覽の場所は東京にては目黒を稱すれども、皆植木師の花園に並へたるのみ。大和の初瀬は昔吉野に次ぎたる櫻の名所なりしが、今は櫻に非ずして、彼ノ長谷寺觀音堂の近傍に多くの牡丹を植ゑて花の盛りは美しき見物なり。

胃。

古へヨリ「命ハ食ニ在リ」トテ、人ノ命アルハ食物ノタメナルコト今更言フニ及バス。故ニ善ク食スル

人ハ強クシテ善ク働キ、食ノハカバカシカラザル人ハ弱クシテ働キ心ノ儘ナラス。タマタマ治シ難キ病ニカカリシ人ト雖、食ノ進ム間ハ心身衰フルコト少ク、遂ニ全治ノ喜ヒアルハ醫師ノ常ニ言フ所ナリ。サレバ身ノ健康ヲ願フ人ハヨク食物ヲ取ル工夫ヲスベシ。ヨク食物ヲ取ルニハ胃ヲ健康ニ保ツ外ナシ。胃ハ食物ノ消化スル處ニシテ、胃健康ナラザレバ食物消化セズ、空シク腐リ滞リテ却テ身ノ害トナルベシ。胃ハ鳩尾ノ内ニ在リテ厚キ肉ノ袋ナリ。食物咽

女 日本書紀 卷之二十一 大和國 金海堂書新林社

ヨリ來リテ胃ニ入レバ胃ノ内面ヨリ胃液トイフ液
オノツカラ出デテ食物ヲ潤スコト恰口中ニ唾ノ湧
キ出ツルガ如シ。此ノ胃液ハ食物ヲ消化スル力ア
リテ食物既ニ消化スレバ遂ニ身體ヲ廻リテ之ヲ養
フナリ。

人其ノ好ム所ノ食物ヲ見レバ唾ノ多ク湧キ出ツ
ルガ如ク胃液モ亦多ク湧キ出デテ消化宜シ。通例
消化ノ速カナル物ハ一時間ニシテ消化シ、遅キ者ハ
三時間前後ヲ費ヤス。故ニ食時ト食時トノ間ハ四
時間ヲ隔テサレバ胃ノ休ム時ナクシテ遂ニ胃ヲ弱

ラスニ至ル。

然レドモ老人ト小兒トハ少シツツ度度食スルヲ
善シトスル場合ヒ多シ。小兒ニ乳ヲ與フルニ其ノ
間二時間ヲ隔ツレバ幾度與ヘテモ害ナシ。

和洋の食物。

吾が國人の常食は米を主とし又魚野菜を用ふる
こと多く、西洋人の常食は小麦と獸肉とを主として野
菜を用ふること少し、これと和洋の食物の異なるあら
ましなり。

食物の同じ量目を取りて比ぶれば、小麦は米より養ひ多く、獸肉は魚肉より養ひ多く、野菜は養ひ最少し。されば日本料理は、西洋料理に比ぶれば、滋養概して薄しと雖、之に馴れたる日本人の腹には却て養生に適すること多しと云ふ。今吾れ等が平生の食物に付て一二の勝れる所を云はん。

米は穀類の中にては最消化し易きものにして此の一事は却て小麦に勝れり。

魚肉も亦獸肉より消化し易し、故に病み疲れたる人の爲には獸肉よりも魚肉を取るべきこと屢あり。

殊に新しき魚の刺し身は最消化し易しとて西洋の醫師も皆之れを賞美せり。

味噌はもと豆にて製し、豆は穀類の中にて最滋養多き物なり。されば味噌汁は滋養の功あるのみならず、軽く胃を刺して胃液を催す功あること西洋料理のスウプの如し。然れども之を好まざる人は却て之が爲に食物滞り、又溜飲を起すことあり。

香の物はすべて消化宜しからざれども、其の風味快くして胃液を催す功ある故、程好く用ふれば善し。蕎麥、温飽、豆腐、蒟蒻などは植物より製したる食物

予 田 林 詩 林 一 篇 錄 一 金 澤 堂 書 林 卷 之 一
の中にて最滋養多きものなり。されば昔よりの習
はしにて精進の馳走には必是れ等の品を用ひ、山家
片田舎に至るまで普く開けたるは、知らず知らず滋
養の法に叶ひたるなり。

先年西洋の學問吾が國に開け初めし頃は、一概に
日本の食物を非なりとする風ありて、殊に味噌、豆腐
などをば汚なく毒あるものと思ひて、學校病院など
に之を禁じたる處さへありき。然るにドイッより
吾が國に雇はれ來りし博士リッテルと云ふ人委し
く其の質を分析して何れも好き滋養品なることを

明かし、加之豆腐は全く植物蛋白とて卵の白身と同
じ質なることをも世に知らしめたり。さて後此の
博士も一日に一度づつは必豆腐を食ひきとぞ。

肉類。

吾が國ハ海國ナル故昔ヨリ多ク魚類ヲ賞味シテ、
鳥獸ノ肉ヲ食フコト少ナカリキ。殊ニ獸肉ハ稀ニ
兎、猪、鹿ヲ食フノミニシテ、家畜ヲ食フコトハ絶エテ
アラザリキ。近年西洋ノ風移リテ始メテ牛、豚等ヲ
食フヤウニナリス。

スベテ肉類ノ人ヲ養フハ重ニ蛋白質ヲ含ムニ由ル。蛋白質トハ卵ノ白身ト同シ質ナリ。又肉ニ伴ヘル脂肪ハ主トシテ人ノ身體ヲ温ムル功アリ。脂肪ハ何レモ消化宜シカラズ、就中獸肉ノ脂肪最消化シ難ク、鳥ノ脂肪之ニ次ギ、魚ノ脂肪ハサノミ甚シカラズ。

肉ヲ買フニハ必新鮮ノモノヲ撰ブヘシ、徒ニ價ノ安キヲ以テ善カラヌ品ヲ求メテ健康ヲソコナフベカラズ、肉ノ新鮮ナルハ惡シキ臭ヒナク、切り目ニ光澤アリ、指ヲ以テ推セバ弾カトテ元ノ形ナニ復ル

力強シ。魚ノ鰓ノ鮮ヤカニ赤キモ亦新シキシルシナリ。

肉ハ煮タル者最消化シ易ク、焼キタル者之ニ次グ。魚ハ刺シ身ニシタル者最宜シケレド、鮭、鱒ノ如キハ生ニテ食フベカラズ、「サナダ蟲」ノ腹中ニ生ズル恐レアリ。鳥獸ノ肉ニハ殊ニ此ノ恐レアリ、決シテ生ニテ食フベカラズ。

吾ガ國ノ料理法ハ大抵汁露ノ煮エ立チタル中ニ肉ヲ入ルルヲ常トス。西洋ノ料理法ニテハ、唯肉ヲ食フコトヲ目的トスルモノハ右ノ如ク煮エ立チタ

ル中ニ入レテ急ニ熱ヲ加ヘレド、汁露ヲ吸ハントス
ルモノハ初メヨリ肉ヲ入レ弱キ火ニテ煮ルナリ。
其ノ故ハ煮エ立チタル汁露ノ中ニ肉ヲ入レテ急ニ
之ヲ熱スレバ、肉ノ表面ノ蛋白質俄カニ凝リ固マリ
テ、内方ノ滋養分ノ出ツルヲ塞ギ留ムレバナリ。

烏と狐。

烏一切れの肉を啣みて木の上^二にあり、四方を顧み
て今也之を食はん^とせり。狐其の肉を見て、恭しく
禮を爲して曰はく「烏嬢か。今日は如何なる吉日ぞ



也、圖らず御身の美しき姿
を見たり。御身の容貌は
孔雀なぞの及ぶ處にあら
ず、聲もさぞかしと思ひ遣
らるるなり^と。烏は之を
聞きて大に高慢の心を起
こし、猶も美音を發して狐
を驚かさんと思ひ、一聲「ア
と云ふほそに肉は地に落
ちぬ。狐は忽其の肉を拾

ひ取り、朝り笑ひて逃げ去りけり。譽むる人には油
斷すべからず。

牛乳。

牛乳ハ滋養最多ク消化最宜シキ飲料ナリ。駱駝、
馬等ノ乳ハ牛乳ニ代用スベキモ品等稍下レリ。牛
乳ハ其ノ儘飲料ニスルノミナラス、或ハ茶ノ中ニ交
ジヘテ飲ミ、或ハ菓子ヲ造ルニ之ヲ加フレバ、舌ニ感
ズルコト滑カニシテ快シ。

牛乳ハ蛋白、脂肪、及ヒ少シノ砂糖等ガ水中ニ混合

シタルモノナリ。其ノ砂糖分甚少キガ故、之ヲ人馬
ノ乳ニ比ブレバ味澹泊ナリ。牛乳ヲ静カニ置クコ
ト數時間ナレバ一層ノ油分カレテ表面ニ出ツ、是レ
ハ脂肪ノ輕クシテ上ニ浮カヘルナリ。此ノ脂肪ヲ
取りテ水氣ヲ去リ鹽ヲ混ジテ黄色ノ塊トナシタル
ヲばたト云ヒ、西洋料理ニ多ク用ヒラル。

乳ノ中ヨリ取りタル砂糖ヲ乳糖ト稱シ、多ク藥用
ニ供セラル。牛乳ニ乳糖ヲ加ヘテ煎ジ詰メ、粘キコ
ト鉛ノ如クナレルヲこんでん屯、みるくと稱シ、罐ニ
詰メテ賣買ス。牛乳ノ得難キ處ニテハ之ヲ湯ニ溶

カシテ生乳ニ代用ス。

小兒ノ初メテ生マレタル時ハ母ノ乳汁甚薄シ然レドモ其ノ生長スルニ隨ヒテ乳汁漸漸ニ濃クナル。不幸ニシテ母ノ乳汁乏シキ小兒ハ生マレナガラ牛乳ニテ養ハルルコトアリ。斯クノ如キ時ニハ生乳ト雖水ヲ加ヘテ薄ラゲザレバ小兒ノ腹ニハ消化シ難キモノナリ。

洗濯。

洗濯を屢すれば織り物の地を弱らすと心得て、洗

濯を怠るはひが事なり。汚れたるを其の儘に置く時は衣服むれいたみて却て地を弱らすものなり。加之、衣服につきたる汚物は身體に吸收せられて健康の害をなすべし。返す返す洗濯は屢すべきことなり。

夜具、寐巻きの如く洗濯の自締なるものは屢日に干し、風を通すべし。斯くすれば健康を助け、保存をよくするのみならず、綿ふくらみて暖かさを益すと誰れも知る所なり。

洗濯を助け、垢を去る力あるもの多し。日向水、豆

腐の湯、大根の湯、皂莢を浸したる水、灰水、洗濯石鹼、洗
ひソーダ等猶あるべし。灰水以下の三つの者は油
垢を去る力最強けれど、染め色を損ずること亦多し、
まづ小切れにて試むる方安全なるべし。此の三品
にて洗ひたるものは清水にて洗ひ返すこと殊に丁
寧にすべし、然らざれば亦地を弱らすこと甚し。

夏の間は言ふに及ばず、春の末より秋の初めにか
けては洗濯に最宜しき時なり。一年の洗濯をなす
は此の時に在り、時雨に逢ひて初めて驚き急ぐこと
なかれ。千年の昔、持統天皇の御歌に、

春過ぎて

夏來にけらし、白たへの

衣干したり天のかぐ山。

樹木の年齢。

松、杉、檜等の切り口を見るに、真中より數十の輪次
第に圍みて、皮はその最終はりなる輪に當れり。是
れ等の木材は年年周圍の方に生長する者にして、真
中なる輪の内は初年の木材なり、第二の輪の内は二
年目に生ぜし者なり、以下次第にかくの如し。故に

子 曰 木 之 年 齡 考 一 篇 集 一 金 沢 堂 書 齋 抄 卷 八 十 九

此の輪を數へば、木の年齢を知り得へし。
木は年を経るに隨ひて其の質緻密になる、故に中
の方は密にして周圍は次第に疎なり。例へば杉の
切り口の如し、真中數十輪の間は密にして赤く、周圍
の數十輪は疎にして白し。此の赤き部分は赤身と
云ひ、美しく且強き故に造作差し物等に貴重せらる。
古木は形容けだかく、村里の景色を添ふるを以て、
永く鋸の齒を免るる者多し。深山は云ふに及ばず、
神社、佛閣の境内には大木、老樹ありて、幹は雲を凌ぎ、
枝は日を遮り、其の年齢幾百年なるを知らざるもの

あり。

吾れ嘗て伊豆の熱海に行きて鎮守の社に大いなる楠あるを見、その年齢を老人に問ひしに、老人曰はく「此の地に楠多し、我れ等は四、五百年の者を鑑定するのみ、之を越ゆれば知ること能はず」と、是れにても古木の多きことを知るべし。

然れども樹木は何れも斯く長壽なるに非ず、木の性によりて長き短き色々あり。例へば桃は生長最速かにして、早く實を結び、花實を兼ね備へたる木なれども、其の齡甚短くして、通例は十四、五年を真盛り

女 曰 木 之 年 齡 考 一 篇 集 一 金 沢 堂 書 齋 抄 卷 八 十 九 十九

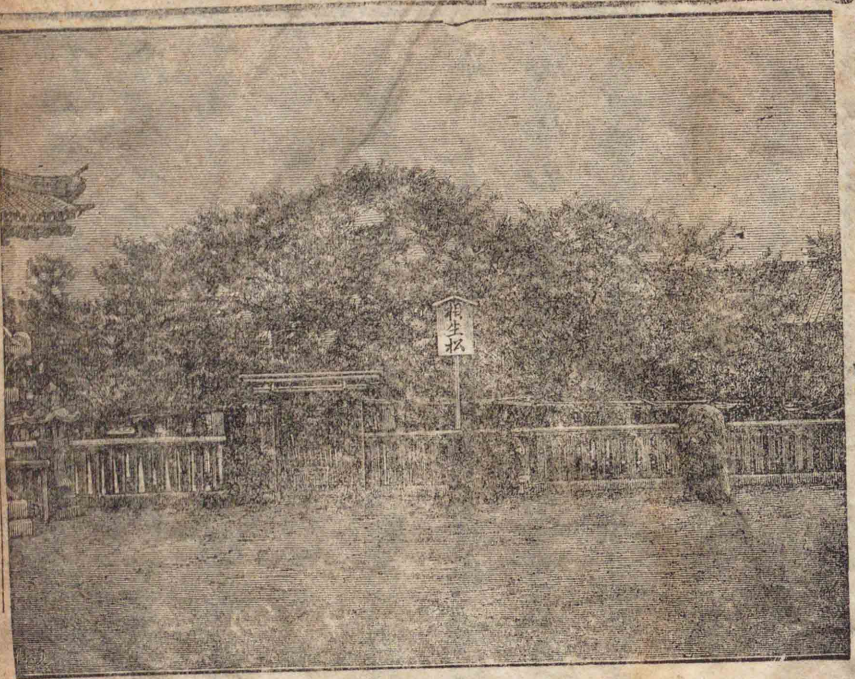
子 氏 神 本 一 篇 第一
金 澤 堂 書 齋 松 本 會 社
とし、其れより漸老衰に向かふ。櫻は花木の王なり
と雖、通例其の一代の長さは人間の一代に似たりと
云ふ。

松は四時色を變へず、齡亦甚長ければ、昔より最目
出たき木として祝はれたり。されど松も亦限りな
き齡を保つものに非ず、古歌に、

其れも猶千代の限りのありければ、

松だに知らぬ君が御代かな。

と云へり。實に古へより名高き松の衰へ枯れたる
者寡からず。近江の唐崎の松は幾百年を経たりけ



ん、定かに知り難けれど、
今は已に老衰して枯れ
んとすること屢なり。
播磨の高砂の相生の松、
又菅公の手づから植ゑ
給ひきと云ふ同國の曾
根の松、共に今は二代目
の子木なり。されば松
も千年を経ることは甚
難きことなるべし。然

女 柳 林 續 水 上 篇 第一

二十 金 澤 堂 書 齋 松 本 會 社

子日
れども樹木の齡も人の齡の如く、養ひによりては發
ばくか之を延へ得べしと云ふ。

出来心。

月末の夕へ、洗濯屋の娘は母の洗濯賃一圓を受け
取らんとて、書き付けを持ちて下宿屋に赴けり。下
宿屋の主人はいと頑固なる男にて、今炭屋と仕拂ひ
の行き違ひを争ひ、左の手に紙入れを持ち、右の手に
煙管を持ち、疊を打ちて怒り罵る最中なりければ、娘
の屢請ふを聞きて、「あな、うるさし。」と舌打ちしながら、

一圓の紙幣を紙入れより出だして投げ與へたり。
娘は虎の口を出でたる如く、急ぎ立ち出でて、道すが
ら紙幣を巾着の中に納めんとしけるに、一圓紙幣二
枚あり。娘はあたりを見廻はす、誰れ見る者も無し、
「さては不意の得分よ。」と喜び限り無かりき。

「是れは吾が物なり、吾が得分なり。是れにて母の
帯びの片側を買はば、古き片側にて妹れ竹の帯びも
出来なん。れ竹の帯びが出来たらは來月より夜學
校に同道して行かん。帯び地の裁ち落とは前垂
れの紐には如何あらん。」とは思ひながら、怒本心に

立ち返り、「否、下宿屋の主人は誤りて二枚を出だしたるなり。誤りなれば此の一枚は吾が物ならず。」然るに出来心と云ふ者又出で來りて、「否、主人が誤りしか、又は吾れに與へし心か知るべからず。もし誤りなりとも、あの澤山なる紙幣の中なれば決して覺ることはあるまじ。」を自問自答しつつ歩み行きけるが、小川の橋を渡り、はや吾が家も近づきぬと向かひの方を見遣れば、學校の森の夕霞みを帯びたるがふと目に留まりぬ。

想へば一昨日の夜、教師は脩身の話を終へし後

「我れも人も智慧と手足とを授かりたり。智慧を研ぎ手足を働かせて怠らずば、貧賤の人も遂に富貴の身となるべし。働かずして他人の物を得んとするは不具の人に同じくして最耻づべき事なり。」と説かれたるを聞き、歸りて母に聞かせければ、打ち涙ぐみて「有り難き教へかな。汝も學問、手藝に早く上達して今の貧しさを昔語りにせよ。」と云はれたるを如何にして忘れしぞと思へば一寸も猶豫も難くなりぬ。今は目覺まし時計の枕元に鳴りし如く、大砲の耳に轟きし如く、娘は跳び上がりて立ち戻り、息をも繼

がす再下宿屋の門に走り來たれり。頑固無慈悲なる主人は「又か。何の用ぞ。」と睨み付けたり。

「一圓の拂ひに二枚を渡し給へり。」と娘が手を振はせながら紙幣を出だすを見て、主人「何、二枚とや、見せよ。成る程。汝は今始めて知りたるか。何故直に返さざりし。」と無骨に詰られて、娘は面を赤め頭を低れたり。

「汝はこれを隠さんと思ひしならん。されども汝が母正直にて之を返させしならん。然らざりせば、吾れは一圓の損をして、剩さへ汝等に侮らるべし。

仕合はせ、仕合はせ。」と口をすぼめて、主人は紙幣を懐に収めたり。

「是れは母の言ひ付けにあらず、自途中より持ち歸りしものを。」と振ひ聲なる娘の顔に涙はらはらと流るるを見て、流石の主人も氣の毒にや思ひけん、銅貨二、三枚を出だして娘に與へたり。

「いやとよ、當然の事をして報いを受くる者にあらずと聞けり。唯願はくは、洗濯屋の娘は不正の者と云ふ疑ひを暗らし給へ。」とて暇乞ひして行くを主人は見送り「あはれ、賢き小娘かな、あれ計りの身にも

名譽を惜しむことのやさしきよ。」と云ひながら奥の方へ入りけり。

其の後此の主人も名譽と云ふ事をや悟りけん、大に行ひを改めて人に信用せらるるやうになりけり。娘は家に歸りて快く眠りぬ。此の娘は永く出来心の不善を記憶し、學問と手藝とを一心に勵みければ、人放れは終に貴婦人と稱せらるるに至らんと語り合ひけりとなん。

かね。

昔より女嫁入りすれば必齒を黒く染むる習はしなりしが、近頃漸すたれんとせり。此の事いつ頃より初まりしか知らざれど、數百年の前よりありし事にて、昔は朝廷に仕ふる男たちも皆「齒黒め」をしたるなり。

齒を染むるにはまづ「かね」を製すべし。かねは鐵漿とて鐵の溶けたる汁なり。之を製するには瓶の中に鐵の屑を入れ、水をつぎ、粥又は鉛などを加へて温かなる處に久しく置くべし。斯くすれば鐵の質追ひ追ひ水に溶くるなり、此の液をかねと稱す。

さてかねを小き器に取りて温め、齒にふしの粉を
すり付けたる上に塗れば、自黒き色となるなり。ふ
しは五倍子とて味甚澁き者なり。

澁きものと鐵と觸るれば多くは黒き色を顯はす
ものなり。たとへば澁ある柿の皮をむきたる小刀
には黒みを生ずるが如し。

されば衣服の黒染めもふしに染めてかねを掛け
たる者多し。此の仕方にて染めたるは初めかねの
匂ひ甚しく、織り物の地を弱むることも甚しく、色合

ひも好き方には非ざれど、費用少きが故に用ひらる
ること廣し。

色。

昔より青、黄、赤、白、黒を五色と名づけて有らむる色
の親とせり。げに百千の色も此の五色の濃さ、薄さ
及び交ぜ方の加減より生ずるなり。

まづ青色の染め草の最廣く用ひらるるは藍にし
て、濃く染めたるを紺と云ひ、薄きを淺黄といひ、猶薄
きを空色、瓶のぞきなど云ふ。瓶のぞきとは藍瓶を

予...
今...
...

ちよそのぞきたる意味なるべし、薄色の手拭の色是れなり。

赤色の染料の最重なるものはへになり。濃きを緋と云ひ、薄きを桃色、紅梅を云ひ、猶薄きをとさ色と云ふ。

黄の染料は鬱金、かりやす等なり。黄と青と交じはれば萌黄即緑となり、黄と赤と交じはれば蒲色となる。然れども必染料を合はせて染むるに非ず、多くは一つの色にて下染めをなし、次ぎに他の色にて染むるなり。

赤と青と交じはれば紫となる。藤色は紫の青み勝ちたるもの、海老色は紫の赤み勝ちたるものなり。紫は最美しく愛らしき色なる故、何れの國にても昔は此の色を貴び、殊に吾が國にては貴人の紫の装束、僧の紫の衣、藝人の樂器に付くる紫の總を皆最貴き位に至らずしては用ふることを得ざりき。

黒の染料は楨椰子染めを貴び、ふし、かねを用ひたるもの之につく。さて黒と赤と交じはれば茶色となり、白に黒みをさせば鼠色となる。其の黒みの多少により又は他の色を少し加ふるによりて、種種の

茶色鼠色を得へし、故に四十八茶、百鼠なその名あり。
 例へば茶色の黒み勝ちて、生なる伊勢海老の皮に
 似たるを海老茶と云ひ、茶色に緑色を交しへて鶯の
 羽色に似たるを鶯茶と云ひ、又鼠色に少しく青色を
 さしたるを藍鼠と云ふ類なり。すへて茶色鼠色の
 中には、目立たず、ねとなしき色合ひ多き故に、衣服に
 用ひらるること最多し。近世の文には多くは鼠色
 を灰色と云ひ、茶色を褐色と云へり。
 染料は右に云へるものの外、猶種種ありて、染め方
 も亦昔より巧みなりしが、近頃西洋より緋粉、紫粉の

如き便利なる染料多く渡れり。
 さて百千の色も其の本を尋ぬれば、青、黄、赤、白、黒の
 五色なること上に云へるが如し。然れども猶一き
 は深く極むれば、ただ青、黄、赤の三色を大本となす。
 但實地染め色及び繪の具の上にては、彼の五色より
 總へての色を得ることなり。

とみ女

四十年ばかりの昔、大坂松屋町の紙屋にとみと云
 ふ娘ありけり。この子七歳の時父を失ひ、兄は仁三

郎とて十四歳、第二人は四歳と二歳となるが共に母の手に養はれたり。
其の翌年、或夜強盗三人各刀を抜き持ち、戸を破りて推し入りけるを、母は早く聞き付けて、末子を抱き裏口より逃げ出でぬ。仁三郎もつづきて出でんとするを盗人ども引き捕らへて「金の在る處へ案内せよ。」と云ふ。仁三郎偽りて「吾れは雇人なれば知らず。」と云ふを「己れ云はずば斯くするぞ。」とて、刀を振り上げてむね打ちに二つ三つ打ちたり。
今年八歳なりけるとみ之を見て、兼ねて年玉なを

を貰ひ溜めたる小袋を取り出で、一人の弟をば後ろにかこひ、今盗人が振り上げし白刃の下に馳せより、「金ほしくば之をまゐらせんほを兄をば助け給へ。それにても許されずは兄の代りに吾れを殺し給へ。」といふ。盗人は之を見て其の友愛に感じて、互に顔を見合はせて、唯其の儘に立ち去りぬ。

其の年政府の手にて一人の盗人を捕らへしに、其の白状の中に此の事を申し出でければ、とみを召して更に問ひ試みられけるに、盗人の云ふ所相違なかりけり。よりて賞美として銀若干を下し賜はりぬ。

此の事世に名高くなり、同地の富家炭屋彦兵衛と云ふものそみを請ひ取りて養女となしけりぞぞ。

金魚。

金魚には紅なるあり、白きあり、桃色なるあり、鼈甲色の如きあり。其の日に映ずる光りは或は金の如きあり、或は銀の如きあり、總へて之を金魚と云ふ。金魚の尾にも色色あり、通常の魚の如く二つに分かれたるをば緋尾と云ひ、三つ四つに分かれたるをば三つ尾、四つ尾と云ふ。三つ尾、四つ尾にして扇の

如く廣がり、尾の長さ全體の半に過ぐる者あり、之をリウキンと云ひ、最人に珍重せらる。

緋鯉は形鯉に同じく、其の色種種あれども總へて緋鯉と云ふ、支那にてはこれを金鯉と稱す。緋鯉の色及び光りは金魚に似たれども、其の



美しきは遠く及ばず。然れども緋鯉は身體壯健にして生長し易き故常に大池の中に飼はれ、金魚は大抵金魚鉢或は小池の中に飼はる。

金魚、緋鯉は近頃西洋に渡りて、大に彼の國人に賞翫せらる。彼の地にては大抵硝子の球或は筒の中に養はれ、屢詩歌にも讀み入れらる。

金魚も緋鯉も大抵同類なり、鮒尾の金魚は形鯉に近く、金魚と緋鯉との中間に在るが如し。鮒尾の金魚を善く養へば體圓く、尾長くなり、其の子孫に至りては遂に三つ尾、四つ尾に化すと云ふ。或金魚師の曰

ふやう、金魚と緋鯉とを一所に飼ふ時は各其の性質を變じ、金魚は悠悠緩緩たるさまを失ひて緋鯉の躁がしきを學び、緋鯉は活潑の風を失ひて稍金魚の遲鈍に似ると。是れを以て思ふにも人は朋友を撰びて交しはるべきことなり。

みし女。

昔安藝の國竹原と云ふ處の農家にみしと云ふ娘ありけり。其の家貧しくして朝夕の竈の烟りも立てかぬ程なるに、老いたる母は、中風にやあらん、手

足もさかぬやうになりて年久しくなりぬ。

さればみしは日夜其の側を去らず看病するに、家はいよいよ貧しくなるのみなり。みしは己れが衣食を減じて、母の食物薬代をまかなひ、少しも之を苦しめず。

父母はみしが年頃にもなりて斯く見る影もなくやつれ居るを心苦しく思ひて嫁入りせんことを勧めむれども、唯一心に看病して従はず。母大いに歎きて「斯く限りもなき吾が病に、いつまでも付き添ひて身の落ち付きを定めずば、吾が心安からず唯病を増

すのみぞや」と度度云ひければ、やうやう或家に嫁しぬ。

さて一月程立ちて後、夫の許しを得て里に歸り再母の病を介抱し、其れより寒暑の折り毎に斯くすること怠らず、二十八年の間少しも變らず、みしは四十四歳、母は六十四歳になりぬ。難病の母にして斯くまで長壽し、顔色も氣分も常に宜しきは、世に珍らしき事にて全くみしが孝行の力なりとて譽めぬ人なかりければ、此の事遂に領主に聞ては、褒美として多くの米を賜はり、世を安く送りきと云ふ。

看病。

世に病人はどあはれなるものはなし。春の花、秋の紅葉も心の儘に見ること能はず、山海の美味も心の儘に食ふこと能はず、讀み書き縫ひ物も心の儘に勉むること能はず、唯つれづれと籠もり居て終日心を傷ましむるのみ。

此のあはれなるものをいたはり慰むるは人たるものの務めなり。殊に女は心やさしく、注意細やかなるものなれば、看病のわざは最適當の務めなり。

病人の室は折り折り明け放して空氣を通し、惡き空氣の滞らぬやうにすべし。然れども風の向きを考へて風の直ちに病人に當たらぬやうにすべし。衣服も折り折り取り替へて風を通し、日に當て、汚れたるをば直ちに洗ふべし。こは常の人にも要用の事なれど病人には殊に心を用ひて万事清潔をむねとすべし。

病室には雜具をよく取り片付け、時時の花、青葉、又は面白き繪などを程好く飾り、事すくなに、奇麗にすべし。立ち居、振る舞ひ、障子の明け立てを荒荒しく、

忙がしくすべからず。何事も病人の心静かならんやうに心付くべし。

病室に在りては憂へ顔をなし或は小聲にてささやき合ひなをすべからず。斯くすれば病人は己れの病重き故かそて心を傷ましむるものなり。又病人に妄に話し掛けて返答せしむべからず。唯面白き話しを聞かせ、又は静かに仕事をしつつ傍に待るべし。

病人の傍にてする仕事は奇麗にて忙がしからず、且道具品物等の散亂せざるものを宜しとす、それに

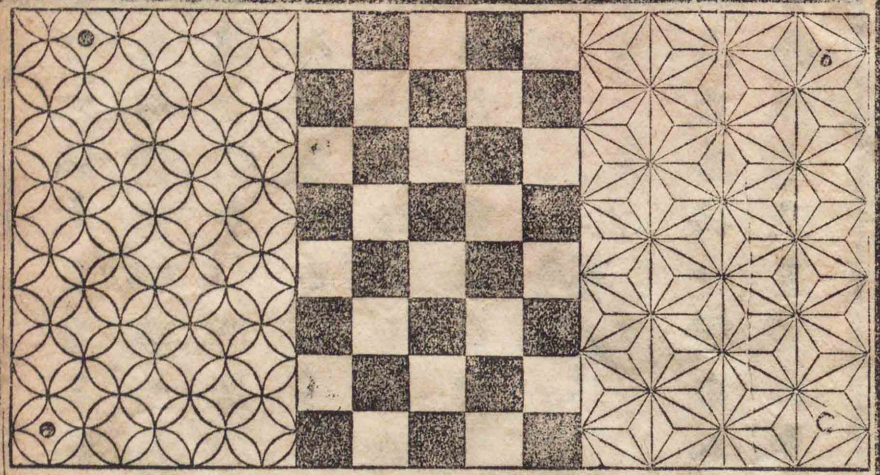
は編み物なを最宜しかるべし。編み物は糸球一つと針數本にて事足り、切り屑なをの出づることなく、時時刻刻に仕事の出来は見ゆる故、病人も見つつ楽しんでみあるものなり。

斯く親切に、細やかに、静かに、面白く介抱する時は病人の心安く平らかにして全快も意外に速かなるべし。世の諺にも「一に看病、二に薬」とて看病の力は、遙かに薬の力に勝るものなり。

編み物。

編み物は稍太き糸を以て手袋、靴下等を編む手わざにして、女子の幼き時最好みてすることなり。之に用ふる糸は毛糸とて、獸の毛を紡ぎ、さて色色の美しき色に染めたるものなり。

毛糸を編むに用ふる器械は數本の針のみなり。針はつむ針とかぎ針の二種あり、つむ針は真直なる針にして、手袋、靴下、腕はめ等を編むに用ひ、鈎針は一端に鈎あるものにして、帽子、肩掛け、涎掛け、巾着、又は



七寶市 松市 麻の葉

肘突き、花瓶敷き等を編むに用ふ。編み目は大凡メリヤスの粗く太きが如くなれども、編み方によりて種種の巧みあり、七寶市、松、麻の葉を始め、松葉、菊花、藤の花等を編み出だす。又梅、菊、牡丹等の一輪を編みて飾りに用ふることあり。市中に賣買する手袋、靴下等

子 印 本 講 本 一 篇 録 一
金 澤 堂 書 林 主 會 社
は大抵大きな器械にて編みたるものにして、一臺の器械を以て一日に數百對を編むことを得るが故、價も割り合ひに安し。されば忙がしき人の強ひて編み物をするは要なき事なれど、暇ある時の慰みに作り置きて、自由用ひ、人にも贈る時は後後までも思ひ出だし言ひ出だす種になりて亦一つの楽しみなり。

吝嗇。

ここに一種の人あり、吝嗇の心其の痼疾となり、唯金銀米錢を妄に貪り藏むる事をのみ好み、是れを積

み貯へて更に用ふる事なく、君親の難儀と云へをも見つぎ助くる事も無し。まして親類朋友の困窮を勞り惠む心もなく、仁愛慈悲の心絶は果て、一向慾心深くして義理の心なき類あり。斯かる人は凡下は云ふまでもなし、譬ひ高位大祿の富貴を極めたる人と云ふとも、唯是れ金銀を守る畜類の如し、人とは云ひ難し。古人之を「錢を守る奴」と云へり。儉約と吝嗇との差別を我が身に善く辨へて用捨し、又人の上をも辨へて懇に是非すべきことなり。

官 崎 安 貞 一 農 業 全 書

儉約。

秀吉公朝鮮征伐の時、或大名使者として彼の地へ渡ることを命ぜられしが、支度に差し支へしかば、黒田孝高に銀百兩を借用しけり。さて使事終りて後、返金せんとして孝高の許に持ち往きけるに、折節鯛一尾到來しければ、孝高家人を召して「今の鯛を三枚にわろし、身は鹽漬けにして貯へ、骨付きを煎て酒を出だせ。」と命じけり。客は之を聞き、扱も大名に似合はぬ客齋かな。」と心の中に賤しみけり。暫くして銀子

を出だし、恩借の禮を述べけるに、孝高は手にも取らず、「その金は最初より進上せし心得なり。且大切なる御用に立ちしこそ此の上もなき仕合なれ。」とて更に受けざりければ、客も始めて孝高の心懸けを感じけり。金錢を積み貯へ、之を以て貧民を恵み、或は學校、病院に寄附し、或は大いなる業を起こし、都へて有用の事に用ひんが爲、平生無益の費用を省くを儉約と云ふ。唯金錢を貯へて、之を有用の事に使はず世間の朝りをも顧みざるを吝嗇とは云ふなり。

女子日本讀本 上篇 第一字解

六憎。

六憎とて憎むべきもの六つあり。金持ちて高ぶる程憎きはなく、書を見ずして物識り顔する程憎きはなく、人に物を遣りて恩に被する程憎きはなく、吝き程憎きはなく、欲深き程憎きはなく、人を猜む程憎きはなし。

柳澤里翁。一雲俳雜錄

女子日本讀本。上篇。第一字解。

〔春の最中〕御室京都の地名にて仁和寺と云ふ寺のある處なり。

〔養蠶紡績〕蠶卵紙俗に種紙と云ふ。

〔木の年齢〕其れも猶此の一首の心は松と雖千代の齡の限りあり、君が御代には限りなければ松も君が代の始終を知り得ずと

〔洗濯〕時雨秋冬 春過ぎて一首の意は春過ぎて夏が來たと見ゆて天の香山に白き衣を干してあるとなり。

天の香山は大和にある山なり。「白をへ」のをへは古代の織り物の名なり。

〔吝嗇〕凡下身分の低き者。

〔儉約〕百兩此の頃の貨幣一兩は今の十圓以上に當たる。

合カ人の難澁を慮むこと。

女子日本讀本 上篇 第一 三十七 金巻堂書譜未成會土

子
印
本
講
本
一
篇
集

金港堂書籍株式會社

全	全	全	全	全	明
三	二	二	二	二	治
十	十	十	十	十	
年	年	年	年	年	年
六	三	三	九	九	月
月	月	月	月	月	月
八	卅	卅	廿	廿	日
日	一	一	六	四	日
日	日	日	日	日	日
發	訂	發	訂	發	印
行	正	行	正	行	行
三	三	再	再	再	再
版	版	版	版	版	版
印	印	印	印	印	印
行	行	行	行	行	行

價	定
上	上
篇	篇
壹	壹
第	第
壹	壹
第	第
貳	貳
各	各
金	金
貳	拾
拾	八
錢	錢
中	中
篇	篇
壹	壹
第	第
貳	貳
各	各
金	貳
貳	拾
拾	錢
錢	
下	下
篇	篇
壹	壹
第	第
貳	貳
各	各
金	貳
貳	拾
拾	錢
錢	

著 者 新 保 磐 次



發 行 者 兼 金 港 堂 書 籍 株 式 會 社

代 表 者 右 社 長 原 亮 三 郎

東京市日本橋區本町三丁目拾七番地
東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

明治三十年六月十一日
高等小學校生徒用教科書
文 部 省 檢 定 濟

明治三十年六月十四日
高等女學校讀書科用教科書
文 部 省 檢 定 濟



